2016 パラリンピック 陸上・ドイツ代表候補マルクス・レーム Markus Rehm

出典：ドイツ・ニュースダイジェスト(2016,1,8)：

<http://www.newsdigest.de/newsde/features/7522-markus-rehm.html>

2016年はオリンピックの開催年。今年8月からブラジルのリオデジャネイロで開幕するスポーツの祭典に世界中から大きな注目が集まるはずだ。また近年はオリンピックだけではなく、続いて行われるパラリンピックへの関心が急激に高まっている。そこで新春号では、欧州各国の注目すべきパラリンピック代表候補へインタビュー。ドイツからは、オリンピックのメダルに一番近いパラリンピアンとして注目を集める、義足の陸上選手マルクス・レーム選手に話を聞く。

PROFILE

1988年8月22日、バイエルン州ゲッピンゲン生まれ。2003年夏、ウェイクボードの練習中に事故に遭い、右足のひざ下を切断。しかし、05年にはウェイクボードのドイツ・ジュニア選手権で準優勝。08年からTSV バイエル04レバークーゼンに所属。09年、IWASジュニア世界大会で走り幅跳びの優勝者となり、翌年は同大会で走り幅跳びと100M走、200M走の3冠を達成した。12年のロンドン・パラリンピックでは、走り幅跳びで金メダル、400Mリレーで銅メダルと活躍。15年10月、自身が持つ障害者（T44）の幅跳び世界記録を更新する8M40を飛んだ。義肢装具士のマイスター資格を持つ。

約束の時間にトレーニング施設の前で待っていると、スケートボードに乗って颯爽と坂道を下ってくる男性が一人。目の前で奇麗に着地し、スケートボードをひょいっと小脇に抱え、こちらに駆けてくる人物が待ち人であると気付くのに、一息分の時間を要した。現れたのは、義足の走り幅跳び選手、マルクス・レーム。

Q：2015年10月、カタール・ドーハで行われた障害者陸 上世界選手権で自身が樹立した世界記録（8メートル29）を大きく更新する8メートル40を跳び、金メダルを獲得しました。この結果をどのように受け止めていますか。

　もちろん、家族や支えてくれている人たちと一緒に大いに喜びました。世界記録を更新するほどのベストな跳躍というのは、毎日飛べるようなものではありません。それを今年一番のハイライトとして目指してきた大会で発揮できたことが特にうれしかった。これよりも良い結果は望めないというくらいの成果だと思います。

Q：世界記録を更新するために、何か新たな試みやトレーニングをしてきたのでしょうか。

少し前から1日2回へとトレーニングの回数を増やしました。現在、日曜日以外は毎日トレーニングを行っています。まず、早朝トレーニングをしてから仕事に向かい、半日の仕事を終えてから、再び練習場へ。着地の時の姿勢や空中での身体の動きといった、記録と大きくかかわる部分の改善に力を入れてきました。そうしたことの積み重ねが、8メートルの大台を超える跳躍を生み出すのに役立っていると思います。

Q：同じ競技で世界を相手に戦う日本人選手としては、T42クラスの山本篤選手がいます。同選手はドーハで自身の大会記録を更新し、大会2連覇を果たしました。

もちろん、彼のことはよく知っています。素晴らしい選手です。世界大会で顔を合わせるアスリート同士は、皆良い仲間ですよ。2012年のロンドン・パラリンピックでは、ポイント制\*が採ら れていたので一緒に飛びました。その後、ポイント制は公正性の面で問題があるとされ、クラス分けで競技が行われるようになりましたが。

\*障害の度合いによってポイントを加算し、総合得点で競い合うルール

義足は、一発逆転を可能にする魔法の道具ではない

Q：2014年7月には、ドイツ陸上選手権で健常者を破って優勝し、陸上界に衝撃を与えました。この時の記録は8メートル24。ロンドン五輪で銅メダルを獲得できる水準の記録でした。それ以降、「義足の公正性」について、様々な角度から議論が噴出しています。このことに関して、レーム選手はどのようにお考えですか。

私はこの大会について、障害を持たないアスリートと一緒に参加することに意義があると思っていたので、記録は同等に扱ってもらわなくてもOKという姿勢で参加を申し込みました。ドイツ陸連が私の参加を許可し、さらに記録についても同条件で評価すると決定したのです。その結果、私は優勝。すると、カーボン製の義足のおかげで記録を伸ばしているのではないかと注目されるようになりました。もちろん、自分としては「フェアじゃない」と言われるくらいなら、優勝を取り消して欲しいと申し出ましたが。最終的にドイツ陸連は、記録は「参考」扱いに、優勝は取り消さず、欧州選手権への出場権は2位の選手に与えることを決めました。

ドーハで行われた障害者世界陸上で、私と2位以下の記録の間には1メートル以上の差がありました。幅跳びにおいて、この差は歴然です。私は、世界のトップ・アスリートたちと肩を並べ、ほんの数センチの差が勝敗を分ける、そんな緊張感のある戦いに身を投じてみたい。そのために、挑戦の場を健常者の大会に求めたのです。障害者が健常者を負かす形で1位になって、「なぜだ？」と疑問に思う人が出てくることは理解できます。ただ、自分が新記録を樹立する度に、「彼は義足だから」と言われることを残念に思います。私の記録は、トレーニングの賜物です。義足は、一発逆転を可能にする魔法の道具ではありません。こういった見方は、これから育つはずの若い世代に悪影響を与える可能性があると危惧しています。

医療技術の発展により、将来的にはもっと接近してくるはずの障害者と健常者の距離。だからこそ、誰もが納得できる形で評価する仕組み作りが進むことを願っていますし、そのための協力は惜しみません。昨年、まずはドイツで健常者と一緒に競技することができました。これはとても素晴らしい試みだったと思います。今はまだ問題点にばかり議論が集まっていますが、障害者と健常者が一緒に競技をすることの意義にもっと光が当たればと願っています。

事故は自分の運命、障害は自分の個性

Q：確かに義足を履けば記録が出るということならば、義足の選手が皆、軽々と8メートルを超える記録を出しているはずですね。ご自身が義肢装具士であることは、記録を伸ばすのに役立っていますか。

現在使用しているスポーツ用の義足については、誰でも私と同じ義足を注文できますよ。皆が平等に技術的な恩恵を受けられるよう、同じ製造元の製品を使用することになっています。もちろん、切断した足の状態によって形状に違いはありますが、素材や構造は一緒。自分が義肢装具士であるがゆえに、義足を改良しているのではないかと思われることもありますが、それもありません。メリットがあるとしたら、サイズやフィット感を自分で調整できるということくらいでしょう。

Q：それにしても、義足をしているとは分からないくらい、自然な動作で歩行されています。義足に慣れるまでにご苦労はありましたか。

私は、義足を使うセンスに恵まれていたと思います。仕事柄、初めての義足をどう受け止めるか、人によって大きな差があることを目の当たりにしてきました。義足を必要とする状況を望む人は一人もいません。そのため、義足に対して拒否感のようなものを持つ人もいます。でも私の場合は、身体の一部としてすぐに受け入れることができました。2008年に事故に遭い、病院の中で14歳になりました。まさに青春真っ盛りです。それまで障害者と接したことがなかったものですから、障害者は不自由で、弱くて、守られるべき存在だと思い込み、絶望しました。でも、すぐにそのイメージは正しくないと気付きました。どういう存在であるかは、結局は自分次第です。事故に遭う前、自分は運動神経に自信があり、スポーツに夢中でした。義足になってからも、同じスポーツの分野に挑戦し、結果を出すことができたので自信を取り戻すことができたのです。

Q：お話を聞いていると、あなたが右足以外、何も失っていないということが分かります。

もちろんです！いや、それ以上にたくさんのことを得ているのです。事故後、自分は変わらざるを得なかった。その変化の過程では、困難なこともありましたが、もはや事故がなければ良かったのにとすら思っていません。こうなる運命だったのです。あの事故によって、家族の絆が深まり、スポーツの楽しみを再発見し、魅力的な職業と出合えた。運命は、幸せな人生を自分にもたらしました。自分は義足を、ハンディキャップではなく、個性だと思っています。障害者と非障害者の違いは、何が得意で何が不得意かということだけかもしれません。

パラリンピック選手も、一流であるということを証明したい

私は、どの大会に参加していても、パラリンピアンです。そのことが私の誇りです。だからこそ、世界の最高峰といわれる大会への出場を果たし、健常者と共にフィールドに立つことで、障害者スポーツにもっと注目が集まることを願って止みません。残念ながら障害者スポーツを二流だとする見方が、まだ強い。しかし、障害の有無にかかわらず、一流のアスリートのパフォーマンスは感動を与えるということを、皆さんには、まずご自分の目で確かめていただきたいです。

Q：今年のハイライトは、リオ・パラリンピックですね！

大きなけがやアクシデントに見舞われなければ、参加できるとみています。目指すは、幅跳びでの2連覇！そして、パラリンピックの3週間前に行われるオリンピックへ参加するチャンスを与えられたら（参加標準記録8メートル15）、それほど素敵なことはありません。たとえ記録が参考扱いになるとしても。それがかなわなくても、パラリンピックで良い成績を出し、オリンピックに負けず劣らず注目を集められるような成績を残したいです。

今はまだ、オリンピックとパラリンピックを一緒に開催するのは難しいかもしれません。しかし、オリンピックとパラリンピックが完全に分かれている現在の状況を少しずつ変えることができれば、新たな可能性や希望が見えてくるのではないかと考えています。オリンピックの閉会式で聖火が消え、パラリンピックが別の聖火を再び灯すのではなく、「次は君たちパラリンピアンの舞台だよ」と、オリンピアンからバトンを引き継ぐような式典になるとか。そういう意味で、4年後の東京でのオリンピック・パラリンピック開催には期待を寄せていますし、自分がドイツ代表として出場することも、既に具体的な目標として持っています。

**マルクス・レームの義足が、東京に突きつけたもの**

　リオデジャネイロ・パラリンピックの男子走り幅跳び（切断などＴ４４）でマルクス・レーム（ドイツ）が、８メートル２１の大会新記録で連覇を達成した。リオ五輪の金メダル記録８メートル３８には１７センチ届かなかったが、義足のアスリートが健常者と互角に競える時代がきたことを印象づけた。

　レームは１４歳の時にウエークボード練習中の事故で右ひざ下を切断した。２０歳で義足をつけて陸上に挑戦し、１２年ロンドン・パラリンピックを７メートル３５で制した。復活物語が騒がしくなるのはその後。彼は驚異的なスピードで記録を伸ばし、１４年のドイツ選手権で健常者を抑えて８メートル２４で優勝したのだ。そこから周囲の視線はレームではなく、カーボン繊維でできた義足に向けられるようになった。

　昨年１０月の世界選手権で８メートル４０の世界記録をマークして、１２年ロンドン五輪の優勝記録を９センチも上回った。彼の努力と競技力への称賛は、いつしか「テクニカル（道具）・ドーピング」という声に変わった。リオ五輪の参加標準記録８メートル１５をクリアしていた彼は五輪出場を熱望した。だが、国際陸連は「義足が有利に働いていないことの証明」を条件につけた。結局、レームは五輪を断念した。

　確かにカーボン繊維製の義足は反発力がある。跳躍に有利なのは選手たちも認めている。一方で助走の加速が健常者より劣るハンディもある。レームは７メートル９５センチがベスト記録だった１３年から義足を変えていない。昨年の世界選手権では同じ義足で跳躍した２位の選手に１メートル１４センチの大差をつけている。もっと彼自身の努力や技術が注目されてもよかった。一連の騒動の根底に「障がい者が健常者より跳べるはずがない」という先入観を感じた。

　もっとも平等の条件で競うのがスポーツの原則。パラリンピックでも障害の程度で細かくクラス分けされている。国際陸連が義足で跳ぶアスリートの五輪参加に慎重になるのも当然だろう。ただ、だからと言って排除ありきではなく、順位に関係ない「オープン参加」という形で出場させる選択肢もあったはずだ。パラリンピックの競技レベルの高さを世界にアピールする最高の機会になったと思う。

　数年前まで義足の選手が五輪の記録をおびかすなど、想像もできなかった。テクノロジーは私たちの予想をはるかに超えたスピードで進歩し、スポーツ界にも浸透している。人間の能力と科学の力をどう折り合いをつけるのか。レームの騒動は私たちに実にやっかいな難題を突きつけた。五輪とパラリンピックの間の問題だけではない。例えば、反発力のある人工靱帯（じんたい）や、可動域の広い人工関節が開発されたら、どう判断するのか。そんな時代は遅からずやってくる。

　リオで連覇を達成したレームは「夢は五輪に出ること」と明言した。今回の五輪出場は断念したが、「義足が有利に働いていないことの証明」の結論が先送りされただけだ。２０年東京五輪でパラリンピアン出場の議論が再燃することは間違いない。難しい選択を迫られる。唯一確実なことは、パラリンピアンの記録が今よりずっと伸びているということだ。

【五輪・パラリンピック準備委員　首藤正徳】

<http://www.nikkansports.com/sports/column/hyakkei/news/1711917.html>

NHK Sport Story（2018年7月20日）

義足の跳人 日本で世界記録更新！ マルクス・レーム

2018年7月8日、群馬県前橋市で開かれたジャパンパラ陸上大会。義足で跳ぶ男子走り幅跳びで、ドイツのマルクス・レーム選手が8メートル47センチをマークし、自身の持つ世界記録を更新しました。

右足の義足で踏み切り、8メートルを超える大ジャンプを見せる「ブレード・ジャンパー」こと、29歳のマルクス・レーム選手。パラリンピックの男子走り幅跳びで2大会連続、金メダルを獲得したスーパースターです。

レーム選手が2015年10月に記録した当時の世界記録８メートル40センチは、ロンドンオリンピックの優勝記録を9センチ上回るものでした。リオデジャネイロオリンピックへの出場を目指しましたが、世界陸連との話し合いの末に断念、というエピソードの持ち主でもあります。

男子走り幅跳びの足に障害があるクラスの決勝。レーム選手は、１回目の跳躍でいきなり8メートル18センチを跳んで観客を沸かせます。５回目の跳躍ではさらに記録を伸ばして、８メートル27センチをマークします。そして、観客の手拍子の中で挑んだ６回目･･･。

最後の跳躍で自身の持つ世界記録を７センチ越える8メートル47センチを跳び、世界新記録を出しました。掲示板に記録が映し出されるとレーム選手は、何度もガッツポーズをして大きな声で喜びを表し、客席からは拍手がわき起こりました。この記録は、健常者も含めた男子走り幅跳びで、今シーズンの世界３位にあたる記録だということです。（2018年7月8日現在）

レーム選手

正直、今でも信じられません。このために一生懸命頑張ってきましたが、今日ようやくそれを実現することができました。世界新記録は自分でも驚くべきことで、日本で出せてうれしいです。

２回目の跳躍のあと、今日は記録が出るいい日になると思いました。最後のジャンプのあと、歓声があがったのでやった！と思いました。天気もジャンプも良くてすべてが完ぺきでした。ついに達成できてとても幸せです。観客の声援から、更に遠くに飛ぶためのエネルギーをもらえたし、そのおかげで達成出来ました。

すべてのアスリートと観客に対して「人生に不可能はない」ということを証明したいんです。障害を負っても、オリンピックのアスリートに匹敵するようなアスリートになれることを伝えたい。

自分が架け橋となって、オリンピックとパラリンピックの距離を縮めていきたい、その思いを胸に、レーム選手は2020年へ向かいます。

<https://www.nhk.or.jp/sports-story/detail/20180720_2982.html>

日経電子版2018年８月7日

「五輪で戦いたい」義足ジャンパー、世界記録に迫る ドイツ走り幅跳び　マルクス・レーム

パラリンピアンでありながら五輪のメダリストにも勝る記録を持つドイツの陸上選手、マルクス・レームさん。7月に前橋市で開かれたジャパンパラ大会に出場し、男子走り幅跳び（切断などT64）で8メートル47と、自身が持つパラ世界記録を3年ぶりに更新した。パラリンピック2連覇中の29歳。2年後の東京大会ではどんな跳躍を見せてくれるのか。

8メートル47は健常者の記録で今季世界ランク3位に相当する（7月8日、前橋市）＝共同

1回目からスピード感ある助走と力強い踏み切りで8メートル18を記録。最終6回目は追い風にも背中を押され、砂場を跳び越えてしまいそうなほどの大ジャンプだった。世界新記録がアナウンスされ、固唾をのんで見守っていた観衆から大歓声を浴びると、何度も雄たけびを上げて拳を握った。「いい感触だった。ずっと（自分の）世界記録を破ることにトライしてきた。日本で達成できてうれしい」

「ブレード・ジャンパー」の異名を取るレーム選手は、パラ陸上界を代表するアスリートだ。2014年にドイツの大会で健常者を抑えて優勝した経験を持ち、15年のパラ世界選手権（ドーハ）で当時の世界記録（8メートル40）をマーク。これは12年ロンドン五輪の金メダルの記録を9センチ上回るもので、大きな話題を呼んだ。

世界を驚かせる第一人者はパラリンピアンとしての誇りを持ち、以前から五輪出場を熱望してきた。「五輪でも戦いたいと常に思っている。より多くの人に、我々に何ができるのか見てもらいたいし、夢を持ち続ければかなうという姿を見せたいんだ」。だが、五輪とパラの間に立つ壁は高い。16年のリオデジャネイロ五輪出場を目指したが、「競技用義足が有利に働いているのではないか」という議論が起き、結局、悲願はかなわなかった。

「オリンピアンとパラリンピアンの距離をいっそう近づけたい」と夢を語り、垣根を取り払う協議を今後も続けたいと考えている。前橋市の大会で世界記録を塗り替えた際には「五輪の最後にオリンピアン2人とパラリンピアン2人による混合チームでリレーを行い、パラリンピックにスムーズに移行するのが理想ではないか」と持論を披露した。

今回の8メートル47は、健常者の記録で今季世界ランキング3位に相当する。米国の元陸上選手、マイク・パウエルさんが持つ8メートル95の世界記録にどこまで迫れるのか。そのことに話が及ぶと「僕には高い数字。でも（競技を続ける）モチベーションになっているので、チャレンジしていつか抜ければ。それが（20年の）東京だったらうれしいね」と声が弾む。

どれだけ遠くへ跳べるのか――。その挑戦に限界はない。「パラの選手がどれだけできるかを見てほしい。そのための努力は続けていく」。2年後の東京では、さらなる快記録を目の当たりにするかもしれない。（渡辺岳史）

<https://style.nikkei.com/article/DGXMZO33047540X10C18A7UU2001?channel=DF290620172658>

Kan Para Press 2018年8月25日

マルクス・レーム、幅跳び8m48で世界新！ パラ陸上ヨーロッパ選手権

パラ陸上のヨーロッパ選手権は25日（現地時間）、ドイツのベルリンで、男子走り幅跳び決勝（T64＝下腿義足使用）が行われ、ドイツのマルクス・レームが、6本目の跳躍で、自身の持つ記録を超える、8m48cmの世界新記録で優勝した。

 　種目が異なるので単純に当てはめることはできないが、2018年シーズンの男子走り幅跳び3位に相当する記録だ（8月25日時点）。

子どもの頃からスポーツ好きだったレームは、2003年ウェイクボードの事故で右脚の膝から下を切断。その後、走り幅跳びを始め、2012年には初出場のロンドン・パラリンピックで7m35cmを跳び、金メダルを獲得した。

2015年10月のパラ陸上の世界選手権（カタール）では、8m40cmの記録で世界記録を樹立。この記録が、ロンドン五輪走り幅跳び金メダリスト（Greg Rutherford／英国）の記録を9cm上回っていたこともあり大きな話題となったが、同時に義足での踏み切りは有利ではないかという論議も起こった。

　2016年、リオデジャネイロ・パラリンピックでは、8m21cmの記録で大会連覇を果たす。先に開催されたリオデジャネイロ五輪の出場も目指していたが、国際陸連（IAAF）から五輪に出場するには、義足には有利性がないことを証明する事を求められた。専門家の協力も得て証明を試みるも、国際陸連からは「証明は不十分」と判断され、リオ五輪出場は叶わなかった。ただ、当時の国際陸連は、継続して義足の有利性を検証していく意向を示していた。

<http://www.kanpara.com/news/7164/>